



▲スカイA中継のゲストとして来場していた「神スイング」のタレント・稲村亜美さんが名和に祝福の花束を贈呈。2人はT V番組で共演したことのある旧知の間柄とのこと

・選抜大会(6G)241.66-201.33
・予選(12G)240.83-213.91
・準々決勝(5G)255.60-222.40
・準決勝(5G)243.40-219.60
上の数字は、今大会の各フェーズにおけるトップ通過とカットラインの選手のアベレージだ。

大会中に5つのパーフェクト(村田和子、秋光楓、石田玲奈、岩見彩乃、金子萌夏)と2つの



▲2ndマッチでは268のハイスコアをマークした名和。「石田プロや中島プロの投球を見るとビビってしまうので見ないようにしていた。あのメンバーに勝てるのは一生に一度あるかないかのことも(苦笑)」

800シリーズ(小林あゆみ、鶴井亜南)も達成されるなど、女子プロの公式戦としてはまれに見るハイアベレージのサバイバル戦となった今大会は、ゼロスタートの準々決勝で様相が一変した。予選の上位8名で同圏内に踏みとどまったのは鶴井と岩見の2人だけ。うち岩見は準決勝で次点の9位に後退し、最終的に別表の8名がシュートアウト方式の決勝へ。名和は予選27位からジャンプアップしての3位進出だった。

5~8位の4名による1stマッチでは、松永裕美と大嶋有香が245の同ピンでワンショットプレーオフにもつれ込み、大嶋がこれを制して勝ち上がったが、余勢を駆って臨んだ2ndマッチは212どまり。気鋭の若手、石田万音と中島瑞葵も思いのほかスコアが伸びず、268を打った名和が優勝決定戦進出を決めた。

トップシードの鶴井は、予選から終始240超のアベレージを維持して絶好調。対する名和

アイキョーホームプレゼンツ プロレディース2024

6月13~16日
アイキョーボウル

梅雨の季節に“秋”晴れ!

名和秋がハイアベレージのサバイバル戦を制す

6月13~16日の4日間、千葉県印西市のアイキョーボウルにプロ123名・アマ20名が参加して行われた「アイキョーホームプレゼンツ プロレディース2024」は、3位進出の名和秋(35期/相模原パークレーンズ)が決勝シュートアウトを制し、昨年11月の「ROUND1 GCB FINAL(レギュラー部門)」以来の通算5勝目を挙げた。

(主催:(公社)日本プロボウリング協会/特別協賛:アイキョーグループ)



▲トップシードの鶴井は悲願の初Vならず。それでも昨夏のトーナメント復帰後ベストの成績に「すごく自信になりました」と表情は晴れやかだった

は年初から腰に不安を抱えており、鶴井の悲願初Vが濃厚かと思われたが、優勝決定戦では10フレに選択した左レーンで不運な⑦ピンタップが相次ぎ、ともにノーミスながら、7フレからターキーの名和に2マーク後塵を拝して涙をのんだ。最後は歴戦のキャリアの差が出た印

象だ。

「優勝決定戦は左のレーンの変化が早く怖かったけど、10フレが右レーンだったので、私としては助かりました。宮崎オープンの前に腰を痛めて、そのときはコルセットをバキバキに巻いて投げていました。今回はテーピングだけで投げたので不安もありましたが、結果的にはよかったです。今は若い子たちが中から投げて外が潰されはいかなくても、私も中を投げられるようにしなくちゃという



▲松永とのワンショットプレーオフを制して1stマッチを勝ち上がった6位進出の大嶋だが、Vには届かず

思いがあって、少し攻め方を変わったのもよかった」と名和。うとうしい梅雨の季節に“秋”晴れの笑顔を見せた。

優勝ボール: ナノデス・アキュドライブII (ABS)

今月の表紙・名和秋

去年の優勝もうれしかったけど、今回は今回で決勝のメンバーもすごかったので、そこで勝ててうれいす。正直、予選からハイゲームの打ち合いで怖かった。とくに私

のボックスは全員シードプロで勢いがあつたし。今は若い子たちがどんどん台頭してきていて、優勝することも、シードを守ることも大変な状況。今回は準々決勝のゼロスタートに救われました。



▲決勝シュートアウト進出の8名。左から最終順位順に名和、鶴井、中島、大嶋、石田、松永、倉田、宮城。右端のベストアマ・鈴木サラ選手(総合14位)は、前週のレディース新人戦アマの部優勝に続く殊勲

●決勝シュートアウト

鶴井 亜南	206
石田 万音	192
名和 秋	268
中島 瑞葵	216
松永 裕美	245(9)
大嶋 有香	245(10)
宮城 鈴菜	191
倉田 萌	225

優勝: 名和 秋

スカイAカップ2024 プロボウリングレディース新人戦

6月8・9日 ポウリング王国スポーツ八景店

"大器" 近藤菜帆、2年目で新人戦卒業

8位に終わった昨年の雪辱を果たし、晴れて新人戦卒業の近藤。右肘の痛みを押しつけて豪快なスブラッシュを響かせた(優勝ボール: サミットボールSTORM)



倒した相手は徳田有紀(55期)、坪井美樹(56期)、渡辺莉央(56期)、横山実美(54期)の4名。坪井との2回戦ではあわやパーフェクトの299をマーク、ストライク時のスブラッシュ音は他を圧していた。

4タテといっても昨年、実技テスト免除でプロ入りし、すでにレギュラーツアーのタイトル(第45回ジャパンオープン)も獲得している近藤の実力を思えば順当な結果と見ることもできるが、実はこの日、彼女は

不測の事態に見舞われていた。

「朝起きたら右肘に痛みを感じて、準決勝前の投球練習ではもう投げられないと思うほどでした。普段から『小指の使い方が下手』と言われていて、肘の痛みはそれが原因かも」

患部に急造のテーピングを施しての、覚悟の見切り発車。それでも準決勝6Gを1260で乗り切り、前述のとおり4タテVを決めてしまうのだから、やはり“モノが違う”のだろう。

横山との優勝決定戦は2、



勝つては予選から同じボックスで決つて当たるのが怖かったと苦笑

3、5フレとアンラッキーな⑩ピンタップが続き、抜きつ抜かれつと接戦となったが「内ミスして⑥⑩が残った7フレ(スペア)で気付いたことがあった」と、きっちり修正して8フレから3連発。217:205で1期先輩の横山を振り切った。

「決勝トーナメントの1回戦は慎重に行き過ぎてスコアが伸びなかったため、2回戦からは手前を使わずに奥でピンアクションを起こすことを意識して投げました。優勝決定戦では急に⑩ピンが飛ばなくなつて焦つたけど、コンディションが変化してきたときの対処がいちばん大事。余計なことは考えず、自分でやれるだけのことをやろうと思ひ直しました」
デビューイヤーの新人戦は、6位で決勝

トーナメントに進出して1回戦敗退。その雪辱を2年目で果たした“大器”は「ポイントよりもアベレージ。どの大会でも上位に入ってアベレージを落とさないようにしたい」と、意外な目標を口にした。

なお、21名が参加したアマの部の優勝決定戦は、鈴木サラ選手(湘南とうきゅうボウル)が209:205で室伏萌選手(アイキョーボウル)を破り、初優勝を飾っている。



▲(左から)1~4位入賞者とアマの部優勝の鈴木選手。1位進出だった渡辺は準決勝4フレの⑩ピンバミからボウリングが崩れ、スコア差で4位まで後退

●決勝トーナメント(準決勝・決勝)

横山 実美	279
金子 萌夏	211
渡辺 莉央	193
近藤 菜帆	244

優勝: 近藤 菜帆

(主催:(公社)日本プロボウリング協会/特別協賛:(株)スカイA)